



ビキニの灰から

多田鐵雄

ビキニの灰をかぶつて第五福竜丸が焼津の港に戻つて来た事件は、次第に忘れかけて行つた広島、長崎のあの当時の悲惨な思い出をまざまざと呼び返しただけではなく、その後、実情が調査されて行くにしたがい、更に危険指定水域をはるかに遠く離れて航行していた他のいくつかの船舶にもこの灰がそそがれていたことが明らかにされて来て、原爆、水爆が被害を与える範囲、領域の広大さは、私たちが、すでにつねにその危険にさらされているのだと云うことを、はつきりと悟らせたものであつた、と云うのは、単に一朝、事が起つて、わが国が攻撃側の目標とされる場合だけに限るのではなくて、たとえ我が国が紛争の渦中にまき込まれていない場合でも、例えば事が隣接の国々に起つて朝鮮が目標にされた時でも、或は放射能の色々の作用、影響から云えば、中国、ソ連が攻撃の目標にされた時でも、我が国もすぐさま色々な面で、直接、間接に大きな被害をうけずにすまされぬと云うこ

とが推定され得るに至つたからである。

一端、事が起れば、現在私たちが毎日身心を賭して丹誠して導き育てている可愛いこの幼児たちの凡てが、一瞬にしてあの悲惨な死の運命に直面するのである。そのことを思うと、これはすでに幼児教育者にとつても、決して縁遠いことではなく、むしろ身近かな、切実の問題になつてしまつているのである。私たちはそのような事態が起つた場合を想像して、居ても立つてもいられなくなるような恐怖と云うか、怒りと云うか、焦躁と云うか、暗い暗い気持につつまれてしま

う。けれども、えてして私たちは、このように一応は心からそれを感じながら、いつしか、はりつめた心もゆるみ、「誰かがその内にどうにかするだろう」「どうにかなつていくだろう」と云つた諦めに似た自慰の気持がひろがつて来て、「ともかくも毎日の丑分の仕事をばげむことだ」と云う態度にな

つてしまふのではないだろうか。もとより、その心配が片時も頭を離れないのでは神経衰弱になつてしまふわけで、このような自慰と云うか諦めと云うか、それは大切である。然しそれが無関心になつてしまつてはならないと思う。

私たちは日常の仕事に打込みながら、このような事態の起らないように絶えず協力し努力して行かねばならないのである。かと云つて、戦争絶対反対だ、軍備撤廃だ、平和教育だと云つても、それも亦あまりに近視眼的である場合があるし、ある意味では理想論にすぎない。

戦争はたしかに罪悪だと云つてよい。世界の誰もが平和を欲していることも事実である。然し現実の世の中にはあいかわらず罪悪は、多くの努力にも拘らず、絶えず行われていく。又世界のどこかに自己の利益のみを考へて他の犠牲を省みない一群が存在しているならば、そして戦争によつて何らかの自分たちの利益を考へる人たちが少数でもいるとしたらそれ以外の凡ての人々世界の大多数の人々の平和のための真剣な貴い努力も、ある場合には水泡に帰してしまふのである。私たちは幼児を、児童を、生徒を、学生を、平和を愛好する人間に教育して行かなければならないし、彼等を戦争の不幸から守つてやらなければならぬ。然し同時に、世界中の成人を、平和を愛好する人間に、平和を守る人間に、一人残らずをそのように教育することが出来てしまふまでは、戦

争の危険は依然として去らないのであるし、真の平和、永遠の平和は到来しないのである。云いかえれば、若干でも戦争の可能性が存在する限り、軍備制限とか、原爆・水爆の使用禁止とかを——勿論その努力は推進して行かねばならぬが——はかつても、それは事態をある程度柔らげ、好転させ、人類の不幸をやや少くするだけのことであつて、危険の可能性はあいかわらず存在するのである。ここに目標と努力の方向はひとしく平和愛好戦争の危険絶滅であつても、そこまです達する現実の過程においては、今述べたようなことも含めて色々な手段、方法、順序があるわけで、そこにこの現実を賢明に処理して行く政治の使命と特徴があると云えよう。

私たちの社会生活一般が、政治や経済に直接結び付いているように、教育も亦政治や経済に直接結び付いているのである。そのことは政治の教育支配、経済の教育支配と云うことでは必ずしもない、この問題についてはここではふれない——。早い話が、先頃文部省から刊行された教育白書『わが国教育の現状』を批評して、本年三月号の文部時報において矢口新氏が正しくも「金がないのはもうあたりまえで一応納得するが、それにしてもと云うことをわれわれは望んでいるのである。こうあとからあとからどれもこれも金がありませんといわれるとうんざりしてくるのである。教育万金金の問題という分析であつてはならない」と指摘している通りで、

たしかに教育は金を必要とするし、金によつて効果が左右されるが、であるからと云つて教育努力は無限に金を要求することではなくて、限られた予算、可能な経済の枠の中で、いかにして、より良い教育をなして行くかに問題はかかつているのである。節約と云う意味を本来的にもつ経済と云う言葉が、ここでも考え合わせられるであらう。ひるがえつて、この教育費を策定する根拠が教育立法、教育政策であることを省みるならば、ここでも政治が直接、間接に教育に結びついていることは自明の理であるし、前述のように、平和のための政治も亦、直接に教育に関係して来るのである。従つて私たち教育者は、教育を考へるとき、同時に政治をも考へないわけには行かないのである。私たちはつねに政治の在り方を見守つて行つて、為政者が賢明に現実を理想に近付けて行く努力をしているかを、又その方法が正しく行われているかを監視して行つてこそ、初めて教育があるべき姿をたもち得るのである。

しかしながら、その事が実は容易なことではないのであつて、その例を直接に教育を対象として立案され、多くの論議をかもし出してゐる教育中立法案——おそらく本稿が活字になる頃には、すでに可決されているか、葬むられてしまつてゐるかのどちらかであるが——にとつて眺めて見よう。もともこの法案に対しては、直接に關係のある父兄の側、現

場の教育者の側から、もつともつと発言があるべきだと思ふし、もつともつとよく考へた意見が出て来るべきだと思われるのであるが、この法案がたとい可決されたにしても、それで問題が終つたのではなくて、むしろ問題はこれから初まるのであり、今後更に更に考へて行かねばならぬことだと思ふのである。

- 教育中立法案に関する賛否の意見の焦点を概括して見ると
- 1 この法案の立案の動機が社会党と協同戦線に立つと見られる日教組に対する対策であつて、しかも自由党が反対党たる社会党の勢力を削減せしめようとする企図からなされた不純なものであるとすることに關する論議
 - 2 それに關連して現在の日教組自体の在り方に關する論議
 - 3 日教組の責任の有無は一応問題外として、偏向教育が一部に行われているか否かの論議
 - 4 偏向教育が一部に行われていることを肯定した上で、それ故にかかる法案が必要である、又何等かの対策が必要であるが、この法案は不適當であるとする論議
 - 5 偏向教育が一部に行われていることは認めるが、それだからと云つて、他の正しい教育の行われている面も含めた全体を律するかかる法案、又は何等かの対策は不必要、有害であるとする論議
 - 6 いわゆる偏向教育こそが眞正な教育であるとするとする点に關

する論議

7 世界観の相違から由来する論議

8 立案の理由となつた現実の事態とは別に、この法案自体がもつところの、教員の自主性侵害の危険性に關する論議とすることが出来よう。そしてこの法案はこれらの問題点を内蔵しながら法律にならうとしているのである。

この法案を支持するのは一言にして云えば、保守政党和一部少数者だけであり、學者、教育者、新聞關係者、その他の圧倒的多数がこれに反対であるとされている。然し反対意見の内容をよく吟味して行くと、上に述べた沢山の争点のうちどのいづれか一つを根拠にして、或はその二三を根拠にして主張している場合が可成り多く、これら凡ての争点をことごとく吟味した上で反対論を主張しているものはあまり多くないのである。これらの争点の一つ一つが夫々に重要な意味をもつている以上、単に反対が圧倒的に多いと云うだけではすまされない問題である。

私たちは早急にこの法案に賛成し、反対する前にもつとつと考へなければならぬのであつて、その点で早急に事を運ぼうとする政府及び保守政党的態度に反対すると云うのであれば、それは当然のことであろう、かと云つて真に正しく教育が行われて行くためには、たとえば一体偏向教育が一部にあることを認めたとて、それが全部でないから構わないな

どと云うことが教育の世界にあつてよいものであろうか。殊にこれは被教育者の精神發達段階の相違によつて大いに性質を異にして来るのであるが、何にしても、たとえ実際には誤つた教育を絶滅することが出来ないまでも、その絶滅を不斷に志向すべきではなからうか。そしてそのために出来るだけの手段を講ずべきではなからうか。一方、教育者の信念、言動がいわれるように不当に圧迫されるような結果が生ずるとしたら、これも亦由々しい問題である。

このように教育中立法案一つをとつて見ても、単に賛成、反対の意思表示の奥に——この意思決定も重要であるが——実は私たちが教育に當たるために、もつともつと考へなければならぬ問題が沢山含まれているのである。しかもこのように複雑な様相をなして横たわつているのである。一見したところ教育には直接關係がないように見れる政治にしても、実は必ずその奥で深く教育に關係しているものであり、その故に却つて問題はより複雑で、見極めのつきにくい場合もある。實際のところ、政治は他の人々にとつて少しも劣ることなく、私たちが教育者にとつても、自分たちの問題なのである。私たちがつねに政治に關心をおこたらず、又政治の奥にある問題を念頭においてこそ、初めて直接にビニキの灰にながるのである。